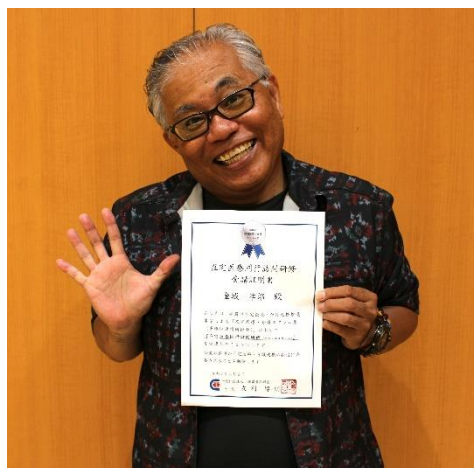


那覇市在宅医療・介護連携推進事業 在宅医療同行訪問研修報告



氏 名：金城 孝郎（理学療法士）

所属施設：セレニティパークジャパン沖縄

分 野	訪問栄養
実施日時	令和7年4月7日（月） 13時00分～16時00分
研 修 先	ゆずりは訪問診療所 石上 管理栄養士
実施報告	【サマリー】 本研修では、ALS患者様宅での訪問栄養指導を通して、筆談による効果的な意思疎通方法と、個々の状態に応じた栄養管理の重要性を学びました。 管理栄養士の実践から、栄養と運動を統合したフレイル予防アプローチや、災害時を見据えた栄養支援の知見を得ることができました。 これらの学びは、多職種連携の必要性を再認識させるとともに、理学療法士としての日常実践に活かせる貴重な経験となりました。 ●フレイル予防のための訪問栄養～管理指導 ○訪問先 ALS診断～気管切開後、意思疎通は筆談の利用者さん宅に同行。 ○学び① 初めてのALS利用者さんの療養生活を拝見する機会となりました。 筆談を介した意思疎通の手法は臨床現場でも有用な気づきとなりました。 また、住み心地の良い空間づくりや、石上様（管理栄養士）による最近の栄養摂取状況や気分・体調確認後、入浴によるエネルギー消耗を予測した栄養摂取計画を柔軟に調整する配慮など、効果的な対応だと感じました。 ○学び② 献身的にケアされ気丈に振る舞っている奥様が、夜間対応のためにソファで仮眠を取っているとお話から、家族の介護負担軽減のための多職種連携によるレスパイトケア（休息支援）の必要性を再認識しました。

実施報告

○訪問栄養指導の可能性

石上様（管理栄養士）の丁寧な栄養管理と利用者・家族への寄り添いから、訪問栄養指導の重要性を学びました。

個々の状態に応じた栄養管理が、在宅生活の質向上に大きく寄与していることを実感しました。

【確認報告】

●災害における栄養指導について

石上様（管理栄養士）は、東日本大震災後、避難所での支援活動と継続的なデータ収集をご経験されました。

その実体験に基づき、移住先の沖縄で実践的な栄養指導を行いたいとお考えに感銘を受けました。

本研修後、沖縄県栄養士会作成の「もしものための食の防災備蓄」「沖縄版備蓄食」両パンフレットで備蓄食やローリングストック（備蓄食循環法）の大切さを再認識しました。

●栄養と運動の関わり方について

石上様（管理栄養士）から、ALSのような神経難病患者における適切な栄養摂取と、残存機能を活かした運動アプローチの組み合わせについて学びました。

特に、『低負荷で継続可能な運動とそれを支える栄養管理の調和』がフレイル予防に不可欠であるという気づきを得ました。

研修を終えて

【振り返り】

今回の在宅医療同行訪問研修を通じて、フレイル予防における栄養面の重要性を深く学ぶことができました。

特に訪問栄養指導の実践から、個別性に配慮した支援の重要性を再認識しました。

また、災害時の備えと日常のフレイル予防が密接に関連していることも大きな気づきでした。

【今後の展望】

本研修で学んだ神経難病患者への栄養・運動統合アプローチの知見を深めるとともに、高齢者支援活動においても栄養と運動の視点を取り入れていきたいと考えています。

『平時の健康づくりが災害時の対応力向上にも繋がる』という視点を持ちながら、地域の皆様のQOL向上に貢献していきます。

【謝辞】

ご指導いただいた関係医療機関の皆様、研修機会を提供いただいた地域医療関係者の皆様、本研修に関わりました全ての関係者・関係機関・利用者ご家族の皆様に、心から御礼申し上げます。